第3種郵便物認可

差別なくして共生を

'25川崎市長選

明日への輪郭 ⑤

「ようやく川崎市民になれた気がします」―。在日コリアン集住地区の川崎市川崎区桜本のハルモニ（おばあさん）はヘイトスピーチを刑事罰で規制する市差別のない人権尊重のまちづくり条例の制定を見届け、そう喜んだ。植民地支配に始まり、戦中戦後と外国ルーツの人々を「二級市民」扱いし続ける差別がどれほどの排除と疎外感を刻みつけてきたか。その差別を犯罪と定めた全国初の条例がまちのルールとなって12月で6年、政治と行政、市民社会が進むべき指針となり続けている。（石橋　学）

色鮮やかなチマ・チョゴリ姿のハルモニたちが車いすの上で、腕を広げて踊っていた。若者たちの「差別をなくそう！」のコールが響く。9月28日、JR川崎駅周辺の繁華街を彩るイベント「かわさき　ともにフェス＆ノーヘイトパレード」こそは私たちのまちを共につくり、生きている本当の姿であり、希望の未来でもあった。

2016年1月、条例の立法事実になったヘイトデモの抗議に立っていた孫連（ソンヨン）順さん(84)はイベントの感想文につづった。「10年前はたたかった。みんなの顔がきんちょうしていた。今回はみんなの顔が明るかった」

前向きな変化は市が24年に実施した外国人市民意識実態調査の結果からもうかがえる。「最近1年間に感じた不安や危険」を聞いたところ、「外国人であることを理由に脅迫や差別的な暴言を受ける不安」は14・7％で、条例施行前の19年の18・0％から減った。罰則条例による抑止効果でレイシストのデモや街宣は下火になり、粘り強く抗議の声を上げ続ける市民の姿も、このまちのルールである反差別の規範を身をもって示している。

だが、政治が時計の針を巻き戻そうとしている。今年7月の参院選で極右政党の参政党が差別・排外主義「日本人ファースト」をばらまいた。外国人の人権が保障されていないことが問題なのに、差別されている側に問題があるかのように「外国人問題」が語られる。

そして部落差別を20年にわたって続ける宮部龍彦氏が余勢を駆るようにして市長選に立候補。「部落差別は利権」とねじ曲げる極悪なレイシストが公約に掲げる「ヘイトスピーチ条例の廃止」は「差別を続ける宣言」にほかならなかった。

宮部氏は条例が日本人の表現の自由を奪い、分断をもたらすというが、差別を正当化するための詭弁（きべん）がどれだけ間違っているか。

桜本のハルモニ、金花子（チョンファジャ）さんは「ヘイトスピーチ、差別をしないようにパレードを準備した。足りない私でも少し役に立ってとてもうれしいです」と笑みを浮かべ、孫さんも「一回では気持ちが届かない。いつかまたみんなでやりましょう」と言葉を弾ませた。ヘイトスピーチの禁止は差別の恐怖で声を奪われたマイノリティーの表現の自由を取り戻す。差別を排除してこそ排除されてきたマイノリティーの社会参加を保障し、多様で豊かな地域社会をつくる。

実態調査では、外国ルーツの市民が考える「外国人が暮らしやすい社会の実現のために重要なこと」も聞いている。「市長、市議会議員選挙権を持つ」は「とても重要」が24・3％、「重要」が34・3％だった。「私たちのまち」をもっと一緒につくりたい。それが共に生きる市民の思いであり、民意である。

（おわり）

ヘイトスピーチ対策

パレードを楽しみ、条例に守られていることを実感するハルモニたち　＝9月28日、川崎市川崎区